産経新聞　朝刊　和歌山版　2020年12月6日

くじら日記

太地町立博物館から

神経質な性格　難しい飼育

ショーに向けたスジイルカの訓練＝太地町

国内唯一のスジイルカ

くじらの博物館で暮らす小型鯨類9種のうち、ひときわ美しい姿をしているのがスジイルカです。背中は濃い灰色で、腹部はピンクがかった白色。目から延びる暗色の筋模様は名前の由来にもなっています。自然界での生息数は200万頭を超えるといわれ、比較的観察しやすい種類です。しかし、国内水族館で見ることができるのは当館のみで、その理由は飼育が難しいことにあります。

日本におけるスジイルカの飼育事始めは50年以上前に遡ります。数カ所の水族館で試されましたが、神経衰弱などの理由により、いずれも短期間しか飼育できませんでした。いつからか、鯨類飼育の世界では「触ったら死ぬイルカ」や、「ステネラ（スジイルカ属の学名）には手を出すな」などと言い伝えられるようになりました。

くじらの博物館では、2008（平成20）年に初めて、雌雄計3頭のスジイルカを搬入しました。先人が残した飼育記録や文献などの情報を頼りに計画を立てて臨みましたが、飼育日数はわずか4日にとどまりました。その神経質な性格ゆえの扱いにくさは、今まで飼育してきた小型鯨類とは別格で、なすすべがありませんでした。

しかし、この経験から、本種飼育の可能性を見いだすことができました。神経質であるため介助を短時間で手際よく施すことや、外洋性であるため搬入は広く深いプールが適していること、さらに餌付けは人為的な給餌が必要ということ―などです。飼育を重ねるごとに新たな課題に直面し、その対策を立てることで、飼育期間は徐々に延びていきました。

2020（令和2）年12月現在、飼育中のスジイルカ4頭のうち1頭は、飼育7年を迎え、世界最長記録を更新中です。飼育で得られた知見や採取した血液などは調査研究にも役立っています。そして、先月念願であったショーデビューも果たすことができました。ただ、出来栄えは褒められたものではなく、やはり一筋縄では行かないようです。

スジイルカ飼育の歩みは、私の飼育人生そのもので、観察と推理、忍耐と努力、アイデアと工夫など、多くのことを学ばせてもらいました。しかし、「飼育できるイルカ」と呼ばれるまでには、まだまだ研鑽を積む必要がありそうです。

（太地町立くじらの博物館　副館長　稲森大樹）